2024 年
（令和 6 年）
11 月 13 日

むつび

石井十次の会　会報

326 号

児嶋草次郎君との出会いと思い出

石井十次の会　高鍋地区　幹事　田中　隆吉

児嶋草次郎君の思い出は沢山ありますが、今回は三つの出来事を中心に書かせて頂きます。元々高校の美術教師として四十年の間、生徒の皆さんと教育の場で過ごして来ました。昭和40年9月、恩師の平原先生の代理として母校の教壇に立ちましたが、そこで初めて児嶋草次郎君に出会いました。 同学年には、彫刻家の弟や武蔵野美大を出て国学院久我山高校の美術教師になった宮本哲さんや画家「香月泰男」研究の第一人者、安井雄一郎さんなど錚々たる人材がいました。児嶋草次郎君は弟の等（ひとし）の誘いで美術部に入部してこられたように記憶しています。

当時はまだ、男子生徒は坊主頭がほとんどでしたから、草次郎君も坊主頭の似合うむしろ寡黙で控えめな生徒であったというのが私の第一印象でした。有名な画家、児島虎次郎のお孫さんだという事は分かっていましたので、どんな作品を描いていかれるのか楽しみにしておりました。しかし、当時の草次郎君はカフカの「変身」などを読みふける文学青年であり余り作品を制作した記憶がありません。只、活動や会話の中に内に秘められた大きなエネルギーを感じていました。今思えば、それは石井十次先生の壮大な福祉活動や画家児島虎次郎のエネルギッシュな実業家としての才覚の片鱗を感じ取っていたのかも知れません。私の画集出版の際に、草次郎君に寄稿文を寄せて頂いていますが、その想いとも符号していると感じます。 才能に溢れた生徒たちの指導者として、僅か半年足らずの母校での教育経験は、その後の私の教師としての生き方に大きな影響を与えたように思っています。延岡西高校、日南高校、宮崎西高校、高鍋高校と沢山の生徒の皆さんと出会い、多くの逸材を輩出できたことは、教師冥利に尽きる至福の教師人生であったと深く感謝しています。

二度目の出会いは、私が母校を辞任し高鍋町美術館館長に就任した時のことでした。 就任早々、草次郎君が美術館に挨拶に見えました。懐かしさと同時に立派に成長された姿に深く感じ入っていましたが、開口一番「一緒に岡山の大原美術館に行っていただけないか」と言われました。大原美術館といえば、児島虎次郎の収集した作品を展示する為に大原孫三郎が建てられた有名な美術館ですが、高鍋町美術館との関係修復の為に出かけたいとのことでした。草次郎君と土公初代館長と私の三人でお伺いすると大原美術館の大原謙一郎氏や草次郎君の兄である塊太郎先生が重要文化財に指定されている大原家で待っておられました。友好的な会談を終え、高階美術館長の案内で美術館を案内して頂いたり、塊太郎先生と共にご自宅や成羽町美術館を拝見させて頂きました。六年

間の館長時代に友好的な大原美術館との関係を維持できたのも、草次郎君のお陰と感謝しています。

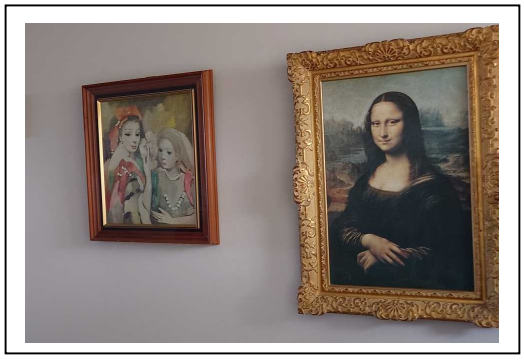
館長時代に忘れられない思い出がもう一つあります。東京の紀伊国屋画廊で開催されていた「増田常徳展」を観て心が震えるような感動を覚え、会場にいらっしゃった増田先生に高鍋町美術館での個展をお願いした事がありました。何度かお便りも差し上げて少しずつ実現の方向へ向かっていきました。ところが、見ず知らずの土地で自分の個展を開催する必然性が無いとの理由でわざわざ東京から高鍋町までお断りする為に来県されたのです。重苦しい雰囲気の中、個展開催の進展が見られず諦めかけていましたが、最後に木城町の友愛園の施設をご案内することに致しました。石井十次先生や児島虎次郎の事をご案内したいとの思いでしたが、増田常徳先生との意外な関係がそこにありました。 石井十次先生が建てられた教会は、今は祈りの丘ギャラリーとして活用されていますが、そこにご案内した時に、ベトナム難民を日本で受け入れたのがこの施設である話になると増田先生の表情が変わりました。長崎県五島出身の先生は、五島列島に漂着した難民の姿を幾度となくデッサンされていました。この教会にそのデッサンを展示したいという想いが先生の脳裏に浮かび、先生の傑作である「もう一つの最後の晩餐」も展示したいと言われました。こうして断念しかかった先生の展覧会が実現の方向に向かったのです。勿論、石井十次先生の存在を知られた事も開催への大きな要因になりました。

石井十次先生の像の誕生秘話

私たちも増田先生も高鍋町美術館での個展開催に向けて着々と準備を進めていた矢先でした。2009年正月明けに突然の訃報が飛び込んできました。児嶋草次郎君のご子息、森次郎さんの交通事故死を知らせる訃報に愕然といたしました。ご子息の突然の死を受け入れることが出来ず、悲しみのどん底にいらっしゃる草次郎君の胸中を思えば、友愛園の教会での展示会は無理ではと判断して増田先生に直ぐお伝えいたしました。その様な事態なら断念されると思っていましたが、増田先生は、画家として違った選択をされたのです。草次郎君に亡くなられたご子息の肖像画を描かせて欲しいと依頼されたようです。草次郎君は思い出すのも辛い心境の中、代わりに石井十次先生の肖像を描いて欲しいとお願いされたとの事でした。こうして石井十次セミナーのポスターにも使用されている名作、石井十次像は誕生しました。当時、悲しみに打ちひしがれておられた草次郎君の心を癒し、生きる勇気をその肖像から沢山頂いたとお聞きした事がありますが、高鍋町美術館や祈りの丘ギャラリーでの増田常徳展は、大きな反響を呼び起こし県民の皆様にも深い感動を与えました。増田先生の画家としての強い意思に改めて敬服すると共に、草次郎君が、不運を克服して逞しく福祉活動を展開しておられることを心から嬉しく思いますし感謝申し上げる次第です。新しく高鍋町に建設された石井記念明倫保育園やせいごろう亭も高鍋の明倫文化を大事にして築かれた事も町民の一人として本当に有難く思っています。これからも、石井十次先生の理念を継承され、益々福祉と文化の発展の為に草次郎君の友愛社事業が豊かな実りを結ばれるよう祈念いたします。

石井記念友愛社の福祉施設を訪ねて④　～石井記念明倫保育園～

「石井記念明倫保育園」は、高鍋町の明倫文化の中心地にあります。高鍋町立六日町保育園が平成１８年に民営化され、「石井記念明倫保育園（定員９０名）」になりました。今年６月からは複合・共生施設として動き始めた「友愛の森」に移転し、現在、８３名が在園（秋以降、新乳児が入園する予定）、２４名の職員が保育に関わっています。友愛通信に同封される保育園だより「めいりん」を通して、遊びながら規則や思いやり、感動や競争心を身につける子ども達の様子が紹介されています。



新園舎への引っ越し作業には、卒園生やその保護者も手伝いに来てくれてありがたかったと園長先生は話されました。

旧園舎は平屋建てでしたが、新園舎は４階建てで、２階と３階が子ども達の主な生活する場となりました。１階に事務室、医務室、給食室、ランチルーム、地域交流スペースがあります。各階の壁面には、大きな額に入った絵画も飾られていて、情操教育にふさわしい環境だと感じました。

新園舎では「組」の名称も変わりました。０歳児「ひよこぐみ」は「宇佐（うさ）組」、１歳児「うさぎぐみ」は「太平（たいへい）組」、２歳児「ぱんだぐみ」は「正直（しょうじき）組」、３・４・５歳児は「ぞうぐみ」「きりんぐみ」の２組でしたが、「思いやり組」「相助（そうじょ）組」「賢才（けんさい）組」の３組になり、学童は「明倫（めいりん）組」となりました。新しい組名の意味は、園長先生や職員の方々が、子ども達に分かるように話されたそうです。他の保育園では、保育室等の表示は、ひらがなや絵で表されていることが多いのですが、ここでは、保育室も傘立ても漢字で表示してあります。当初は、新しい組名に、子ども達も保護者も「何組だったかな」と戸惑いましが、すぐに慣れて言えるようになったそうです。

４階には避難所が設置されています。旧園舎の時は、年長児は走り、小さい子達は職員におんぶされたり職員が引っ張るリヤカーに乗ったりして舞鶴公園まで避難していました。避難経路に県立高鍋農業高校があるので、高校生と合同で避難訓練することもありました。新園舎に移ってから今までと異なる避難方法になるので、移転後、真っ先に避難訓練をしたそうです。その直後、８月８日に大きな地震が発生しました。子ども達は、階段を駆け上がり、すぐに４階へ避難したそうです。近くの歯科医院の患者さん達も避難されてきたそうです。昼間に災害が発生すれば、保育園の職員が避難してきた全ての人々を受け入れて対応することになります。子ども達のすぐ近くには「防災ヘルメット」や「防災ずきん」が置いてあることや、避難訓練に全職員が積極的に取り組んでいることから「命を守る」保育園だと感心しました。

（編集委員　西村さと子）

高鍋町特別講座　石井十次セミナーを受講して思うこと

私は、去る10月5日（土）高鍋町の先賢と文化財特別講座「石井十次セミナー全4回　石井十次とその時代　その4」を受講した。講師は高鍋史友会会長　石川正樹氏。（石川氏はむつび編集委員会の重鎮）「石井十次セミナー」の最後4回目では、「石井十次を支えた人々」を学んだ。十次なき後の大原孫三郎と児島虎次郎、堤長発、岩村真鉄、柿原政一郎。十次の志は現代にどう引き継がれたのか？

石井十次の会では、友愛社を卒業する若者のうち、向学心のある若者の進学を応援している。この給付型奨学金の事業について説明された。

現在では合計8名もの奨学生が、専門学校や大学や大学院、大学校で学んでいる。これは素晴らしいことだと思う。

私はこの夏、日本テレビ「24時間テレビ」(8 月 31 日～9 月 1 日)でチャリティマラソンを完走したお笑い芸人のやす子さんのことを思い出した。児童養護施設で育ったやす子さんは、今こそお世話になった児童養護施設や子どもたちの為にと募金マラソンのランナーを務めた。 彼女の持ちネタは自衛官時代に学んだほふく前進である。 どうして自衛官になったのかの問いに、「当時は施設の子ども達は原則18歳までで卒園（退所）だったので、衣食住を確保するには、自衛官になるしかあまり選択肢がなかった」と答えている。

全国の児童養護施設を回って、子ども達に笑いと夢と希望を届けているやす子さん。これからも頑張って欲しい。

児童養護施設の子どもたちに、もっとたくさん進学の夢が広がることを願っている。

「石井十次セミナー」は資料の文字が大きく、貴重な写真付きで分かりやすいと好評だった。石川先生ありがとうございました。

（＊現在では 2020 年 6 月に改正児童福祉法が成立。これにより 18 歳の年齢制限が撤廃された。 2024 年 4 月 1 日施行。最長で 22 歳まで施設に残ることができる。）

（編集委員　徳地　順子）

方舟館からのお知らせ

明治末期、岡山から移築され、石井記念友愛社の敷地内に立つ方舟館。現在は石井十次資料館の案内窓口、また、石井十次の会事務局として使われています。

新会員のご紹介（敬称略）

【宮崎市】野﨑 順子　丸山 雅照　本田 敬　日髙 清弘　工藤 柳多 【高鍋町】石川 都美　泥谷 紀美
【高千穂町】亀川 晶弘　【兵庫県】KOBE 三宮・ひと街創り協議会　ザ・ファースト

ここまでの掲載者は編集等の都合により 10 月 22 日までのものとしています。

★次回の通信発送作業は　12 月 11 日（水）12 日（木）いずれも9時からです。
お手伝いいただける方は　0983−32−4612　までお電話ください。

この会報は、宮崎県を中心に全国 1700 余の個人・団体に毎月送付しています。
〒 884-0102 宮崎県児湯郡木城町大字椎木 644-1
社会福祉法人　石井記念友愛社後援会
石井十次の会
TEL/FAX　0983-32-4612
メール　yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp

編集後記

巻頭は児嶋草次郎理事長の恩師である田中隆吉様より、玉稿をいただきました。感動致しました。感謝申し上げます。

編集委員　徳地　順子